

「質的データの取り扱い」

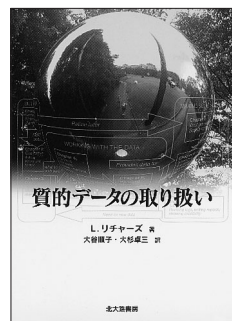
評者 神馬 征峰 東京大学大学院医学系研究科・国際地域保健学教室教授

質的研究が近年ハヤリになってきている。参考書も爆発的に増えている。しかしこの手法を用いて、卒論を書く、修士論文を書く、博士論文を書くとなると容易なことではない。本が増えるほどには教官の数は増えていない。教授の数も増えていない。図書館とて、厳しい選択の際、好んで多くの質的研究の参考書を買ってくれるわけではない。まだ状況は険しいのだ。

そういう中で質的研究を進めようとする際、頼りになるのは限られた数のよき参考書とよき友人である。本書はこれまでの質的研究の参考書とどこが異なるか？ これまでは量的手法との違い、パラダイムの違いなどが強調されてきた。質的研究の存在意義を主張するものが多かった。しかし、十分にその価値が認められるようになった英語圏の国において、「質的研究にとって大事なものは“はじめに手法ありき”ということではない、“はじめにデータありき”ということだ」と本書は主張する。

「データをして語らしめる」ということがよく言われる。実は、質的データを得ることは量的データを得るよりもはるかにやさしい。難しいのはそれを「価値のある」データとしていくこと、自らをして語らしめるデータとしていくということである。そのためにも、データと向き合い、つきあい、加工して、データが何かを語ってくれるようにと強い働きかけをしていく必要がある。やがては、データから飛び立つことすらもできるように。本書にはデータとのつきあい方が具体的に示されて

L・リチャーズ(著)、大谷順子・大杉卓三(訳)、北大路書房(Tel: 075-431-0361), 2009



いる。データの質を高めるためのデータ削減の作業の仕方、そのプロセスで表出してくるアイデアとのつきあい方、さらにデータの意味づけのプロセス、信頼性、妥当性のチェック、等々。

では、これらの作業を一人でやらないといけなのか？ まだ十分とは言えない日本の研究環境では、そうせざるをえないかもしれない。しかし、著者は言う。「できるだけ、チーム作業をするように。無理なら、せめて聞いてくれる相手を探すように。そして話す習慣をつけなさい」と。友人に、監督者に。それが無理なら日記でもブログでもいい。「話しなさい。話すことは書くよりも気軽に、時間もとらないから。話すときは、一人称で話しなさい。それはあなたのプロジェクトなのだから…」

一人で質的研究に取り組む時代には終わりを告げなくてはならない。質的研究の質の向上のために、本書のようなよき参考書を得ること、そしてよき友人を得ること。今の日本の質的研究環境において、とても重要なことだと思う。